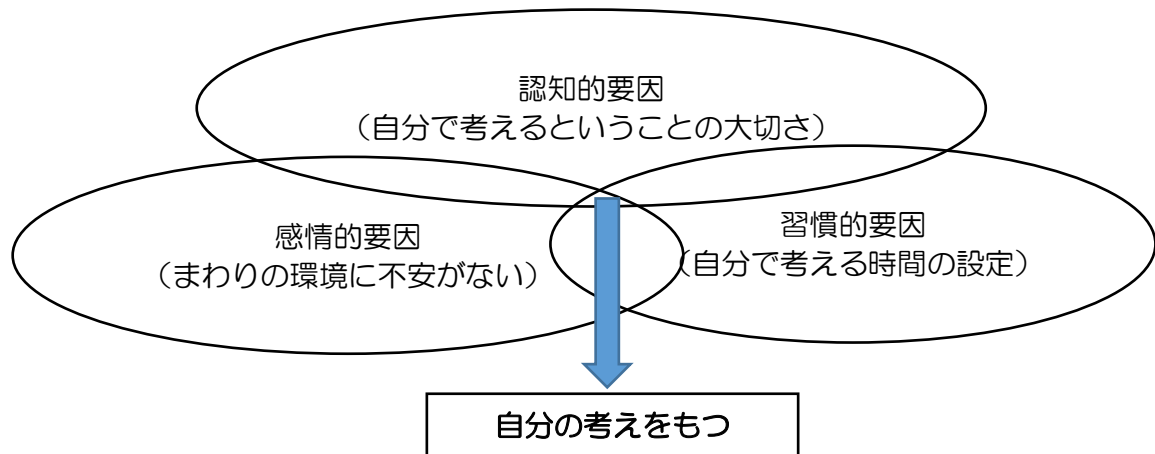


自分の考えをつくるための「3つの要因」

～心理学的技法①～

2024・6・5 重枝 一郎

私たちは生徒に対して「自分の考えをもとう」「自分の考えをつくろう」と声をかけ、授業等を展開する。ただ、なかなか自分の考えをつくれぬ生徒がいるのも事実である。知識・理解が足りないこととは別に、実は「3つの要因」を意識しなくてはならない。



上図のように「3つの要因」が、生徒自身の「自分の考えをつくりたい」という意欲に影響してくる。おそらく「認知的要因」の自分で考えることの大切さは指導できる。また、「習慣的要因」は、授業展開の中に時間をとって設定するだけのことである。しかし、「感情的要因」は学級づくりや人間関係づくりの積み上げの取組が影響する。教科とは違う、特別活動などでGWTをする際に、「自分の意見を言っても大丈夫」という経験を積ませることも一つの手である。私たちは、意欲から落ちこぼれる生徒だけは生んでほしくない。

そこで今号は、いくつかの心理学的な技法について書いてみる。私自身さりげなく実践していたことである。

(1) 感情に働きかける

「意味」と「感情」と「行動」はトライアングルの的に相互作用がある。中高生年代は「意味」で迫ると「そんな正論はわかっている！」という反発感情を生み出しやすい。「意味」で迫るよりも「感情」に働きかける。たとえば、逸脱行為をした際、「どうしてしたの？(意味)」ではなく「どんな気持ちでそんなことをしたの？(感情)」と問いかけるとその後の展開が変わる。

(2) 間接暗示

できるだけ生徒が自分自身でマインドセットできるよう導きたい。たとえば、授業でだらけた雰囲気がある時、「姿勢を正しなさい」ではなく「一回背伸びをしてみようか」のようなことです。直接指導ではなく間接暗示を取り入れる。抵抗感が少ない。

(3) 視点移動

質問の角度を変えると主体性が生まれる。本音と建前の区別が生まれる。たとえば、「高齢者が電車の中で立っていたらどうしますか？」→「席を譲ります」質問の角度を変えると、

「高齢者が立っているのに席を譲らない人がいたらどうしますか？」

「友だちが座っている前に高齢者が立っていたら友だちにどう伝える？」

質問の角度を変えることで、「意味」と「感情」と「行動」が働き合う。

まだあるので(4)以降は次号で